

# 凉鹿子

A traditional Japanese ink wash illustration. The scene depicts a river with a boat in the foreground. The boat is a simple wooden vessel with a patterned interior. In the background, a bridge with wooden posts spans the river. Weeping willow trees with long, slender leaves hang over the water. The style is minimalist and elegant, using varying shades of ink and light washes to create depth and texture.

凉鹿子  
鹿子  
凉鹿子  
鹿子  
凉鹿子  
鹿子

5月号

鈴鹿呂仁

拾掬集 その四十四



胡乱氣に這ひ這ひ廻る雛の朝  
混沌の世を憚らず内裏雛  
土筆摘む己が出る杭戒める  
土筆野や陽を食ひ尽くす子等の空  
ぐい飲みに夢を注ぎたす水仙忌  
春場所や棧敷を過る乱れ髭

佐保姫のどつと乗り込む東上便  
鈍らな生身の重み菜種梅雨  
あゝ上野まんじとも糸の花の乱  
芽吹き初む弟国の空牡丹寺  
三川へ春を走らす男山  
三極の花ふくらんでくる本音  
初虹のデジャビュの街は遠き恋  
のぞみ一号麦秋の風ひろふ

---

— 近 詠 —

鈴 鹿 仁

一 陣 の 風



余 情 と は 一 陣 の 風 花 洛 の 忌

春 呼 び て 気 ま ま に 伸 す 亀 の 首

木 の 芽 ど き 西 山 に 向 く ほ と け 風

— 追 懐 —

逃 げ 道 は 先 細 り す る 春 の 泥 (平成十三年作)

春 雨 の 音 な き 音 に 暇 つ ぶ す ( 〃 )

近詠

和田照海

陶雛

軒下へ潮満ち上がる雛祭

陶雛の機嫌の眉目や灘日和

満ち潮の八重浪日和陶雛

陶雛や妻恋の海風ぎ渡る

雛の灯や弛みてをりぬ力石



松本 鷹根



漁を祝ぐ

神さびや金剛山は恵方晴れ

東風わたる浅葱の池や鯉睦ぶ

雪解川滾り鳴き交ふ鳶の空

春雪の比良映ゆ凧や釣りの黙

漁を祝ぐ湖族太鼓や水温む

## 近 詠

塩貝 朱千

延命水

ため息のやうな風立つ節分草

行間にこころの弛み野水仙

雪解寺あの世ばなしと延命水

春浅し白狐の絵馬につけ睫毛

初午や着物かんざし狐面

# 英華採集

若布刈舟落暉に磯を明け渡す

福 山 石 原 孝 人

北九州門司にある和布刈（めかり）神社では、毎年海岸で若布を刈り採って神前に供える「和布刈神事」が行われるが今年一年の海上の安全、海の幸の多からんことを願い、海の怒りを鎮めることも含まれているであろう。現在、若布刈舟は春の風物詩として地域の特性が醸し出される数少ない季語の一つと言える。その若布刈舟と落日を取り合わせた掲句は、一幅の絵画を見るような趣のある景となり作者独自の表現は、品格のあの一句に成さしめた。

梅咲いて過去へ過去へとちぎれ雲

亀 岡 東 珠 生

掲句には、古歌そして先人の俳句等を想起させる力を感じさせられる。それは、中七の「過去へ過去へと」の措辞にある。先ず上五より兜太の「梅咲いて庭中に青鯨が来ている」の句。そして、道真の「東風吹かばにほひおこせよ梅の花」の歌。夫々の句・歌の意はよく知られており「梅咲いて」と置くだけで春の気が存分に立ち込めているのが分かり、作者の心は春の気によつて過去へ過去へと誘われていくのである。記憶の断片と捉えた「ちぎれ雲」が良い。

黄梅や地図なき明日へ出す一步

福 山 石 田 富 山

鷹女の句に「黄梅に佇ちては待む明日の日を」がある。季語「黄梅」は、控えめな美しさを持ち寒さがまだまだ厳しい早春に花を咲かせてくれる期待感を持たせてくれる。そこに紛れもない春を感じさせてくれるのである。「地図なき明日」にこれからの未来に明るさを感じている作者の前向きな姿勢が見られ、踏み出す一步は力強いものに違いない。この気持ちがあれば、幸と喜びは向こうからやってくるであろう。

# 神麓集

夜 櫻 藤岡紫水

消し切れぬ戦士の記憶春の泥  
春の雷逸れて一天紺一色  
啓蟄や埴輪に一つ傷の跡  
絹に絵を描くごと淡し母子草  
悲しみは秘して捨つべし夜の櫻

柿若葉 沼田巴字

薔薇二輪相思相愛まぎれなし  
碇草沈没船のありどころ  
夢想する恋もあるべし藍微塵  
風に揺れ過ぎゆくいのちけしの花  
柿若葉かなしみ一つ空にやる

風 琴 丸井巴水

風琴の兵はまぼろし追儼の夜  
遊び手の寒夜は爪の伸び盛り  
一膳の覗き目となる寒玉子  
古傷に触れ冬眠の蛇覚ます  
豆腐屋の利き手は清し寒明くる

春疾風 植村蘇星

あかさたな挑む脳トレ春疾風  
独り居と見せむ気骨や春疾風  
老いてなほ極む見聞風光る  
風光る刹那ひらめき先取りす  
百相の見る視る観るの探梅行



# 神麓集

水仙忌 北川孝子

遠比叡雲むらさきにやよひ来る  
乳足りし赤子の眠りひな飾る  
厚雲のほぐれ鳥翔つ水仙忌  
あはあはとみどり児に眉ひな飾る  
人はみな何かに祈る水仙忌

やうやう 直江裕子

思ひつめしやうやうの赤梅蓄む  
大寒の袋に入れる遺品かな  
悔い悔いて大きなマスクの中にある  
大寒や何処歩いてもカメラの目  
片耳を外して眠る霜の夜

雛仕舞 高木晶子

二三匹同じ道ゆく春の猫  
それぞれの昔行き交ふ雛の前  
足跡に花を咲かせて猫の春  
雨音を強しと思ふ雛仕舞  
卒業の目立つ所に忘れ全

画婦像 伊藤希眸

沈丁の花芽は確かと稿いまだ  
思ひきり風雨と車音野水仙  
定住漂泊しづかな老に紅梅散る  
レース編みのやうな淡雪車被ふ  
画婦像の指生きいきと桃の花

# 神麓集

自己嫌悪

奥田筆子

舩挿すや小船に權といふ呼吸  
紙袋へとび込み恋猫自己嫌悪  
屋上の未踏の雪原ありにけり  
穴太積隠忍自重冴返る  
ひなげしの君の微罪のビブラート

回転木馬

井上菜摘子

冬ざれて回転木馬とまらない  
山茶花は聞き流すから植ゑておく  
うすごぼり平常心はこんなもの  
弔ひののどの渴きや風花す  
ちひろ展あの日雪の靴である

孤影

村田あを衣

つくし野へ置き忘れたる遠眼鏡  
ひな僧のつむりは清し雛の間  
業平の文待ちかねて春告鳥  
さざなみは遠嶺がすみの風便り  
はばたきや孤影まぎらす残り鴨





# 京鹿子集

## 鈴鹿呂仁選

一台の自転車枯野の発火点

母子手帳持たされてゐる雪女

蠟梅の香りを住宅地図に足す

胸中で暖める案春浅し

紅梅のジグソーパズル埋めて咲く

寒明けの姉妹にたまごかけご飯

見えはじむ双子の個性ふきのたう

お揃ひの冬帽を裂く発車ベル

午後からはいつもの頭痛ぼたん雪

雪消えてまた淋しさの始まりぬ

京田辺 山中志津子

京都 井尻 妙子

遠まはりしてくるひぐれ芹の水

パーラーへ現地集合地虫出づ

天空の落款としてふきのたう

金鳳華もう使はないイヤリング

猫の恋エデンの園のほど遠し

早春と書けば黄色の花が咲く

二つ知り一つ忘れて春手袋

こまがえるぬかるみを跳び二月尽

宇宙など望外のこと地虫いづ

綿虫を放つ風神青信号

城陽 鷺山 珀眉

片山 熙子

嫁が君いま屋根裏の住住ひ  
福 山 亀井 福恵

鳶は輪に鳶は沈思に水温む

一月尽光陰の矢をまぬがれず

今生に明けぬ夜はなし冬銀河

呼べど呼べど冬空は玉鋼かな

心中の鬼の数だけ年の豆

露の臺廢線近き定期バス

胸中のむしを一喝寒明ける

歩かうよるんるん今日の冬日和

白梅や過ぎて見返り美人佇つ

朧月母乳のやうな香りして

ものの芽のひとつひとつに天のあり

三日はやどこに打たうか句読点

芯に満つふる里ごころ露の臺

若水甘し五感に神の思し召し

棒立ちに乾くジーンズ寒丸なり

望郷の湿り重ねて野に遊ぶ

朝東風や病窓海へ展かれて

湖の東風青き韻律波にのる

強東風や絵からはみ出す雲と水

福知山 西村 滋子

京 都 菊池 和子

高 槻 安田 優歌

若布刈舟落暉に磯を明け渡す

風を踏む小さき靴跡薄氷

楽譜なき水車のリズム寒明くる

点滴の音なき音や春の闇

梅咲いて過去へ過去へとちぎれ雲

寒明けや一錠残る薬瓶

梅二月二人文殊の二十年

東雲あかぎのもんや不開門に春疾風

黄梅や地図なき明日へ出す一歩

河豚ちりや儉しく生きた妣遠し

鬼やらひ愚智も小言もころころと

ラジオ聞く夫の傍ら日向ぼこ

夕東風や待ち人多し再渡来

慶賀かな幸せずしり初抱つこ

天守閣殿様も見た雪景色

冬の奈良天竺語るインド人

福 山 石原 孝人

亀 岡 東 珠生

福 山 石田 富山

アリソナ 伊吹 之博

